

月例研究会（2015年1月28日）

朝鮮海峡を渡った在朝日本人資本家の
都市統合問題と葛藤について
——対馬と釜山を中心に

金慶南

本研究の目的は、1872年から1945年まで、朝鮮海峡を渡った対馬と釜山を境界として住んでいた対馬人を中心に、彼らは明治政府の「国民統合」過程（帝国化）で、どのような生活状況に置かれ、どのような役割が強いられたかについて分析することである。この試みは、在朝日本人に対する既存の認識「草の根の侵略者」について、境界線の変動により再認識する必要があるという問題意識に由来する。すなわち、対馬人は境界線の変更によって、被害者・加害者・被害者として変わるという可変性と、このような被害／加害の二面性を持っている存在として、もっと根底にある本質的な理由を探るものである。

今までの研究は、日本近代史のなかでの在朝日本人は「草の根の侵略者」として位置づけられている。最近の日韓における研究傾向は、都市史、地域史的な観点からアプローチしている。この時期の歴史は、一国史ではなく世界的な観点からアプローチする必要がある。本報告の構成は、第1：朝鮮海峡をめぐる国際関係と境界地域の役割変動、第2：釜山の日本人専管居留地の設置と対馬住民の「移民」、対馬要塞と鎮海湾要塞の設置、第3：在朝日本人が朝鮮地域社会で中心的な地域有力者層として形成していく過程、第4：植民地都市の伝統都市強制統合と地域・民族間葛藤についてその実態を明らかにしたい。その内容を要約すると次のよう

ある。

第1：朝鮮海峡をめぐる国際関係の変動による、境界地域の役割変動について分析している。朝鮮海峡は、19世紀の中頃から帝国の植民地争奪戦の戦略地として位置づけられた。それによって、朝鮮と幕府の貿易中継地として平和的な境界地域だった対馬は、日本の国境として位置づけられた。対馬を中心に考えると、四つの時期と境界に分けられる。第1境界 朝鮮国と幕府の中継地としての境界（1872年以前、対馬藩・草梁倭館と朝鮮国東萊）、第2境界 帝国主義戦争の国境としての境界（1872～1905年、日本対馬と大韓帝国鎮海湾・清国・ロシア・イギリス・アメリカなどとの戦い、釜山日本人専管居留地への移民）、第3境界 植民地の中の地域と地域の境界（1905年～1945年、朝鮮の伝統都市と日本人新都市の都市文化統合過程の葛藤）、第4境界（敗戦後、大韓民国と日本国の国境、対馬と済州道のマラ島）。この時期別に、在朝日本人の役割と生活の状態が変わっていくことに注目する必要がある。

第2：1872年～1905年、帝国主義の植民地争奪戦争中、境界が国境へ変わる時期に、明治政府が朝鮮海峡の日本側には対馬要塞、朝鮮側には釜山に日本人専管居留地と国際法に違反しながら建設した鎮海湾要塞地帯の実態について明らかにする。また、対馬住民を移住させて「大陸侵攻の拠点及び先発隊」として利用する仕組みとその実態について考察した。特に日本国の大陸侵略戦争と対馬人の出稼ぎという両方の観点からアプローチする。

1872年明治政府は宗家の支配・朝鮮国管轄だった釜山倭館を「占領」し、1876年に釜山港と仁川港に日本人専管居留地を設置した。1899年要塞地帯法が施行されて、対馬要塞には、漁業活動の許可、移民の奨励による人口減少など住民がここで生活するには制限がもたら

され、危ない村、貧しい村へ変えられた。日本国は釜山港に、対馬住民の2,000人にパスポートを発行して移民させた。一方、明治政府と軍部は、日清戦争・日露戦争を準備するため対馬・釜山・馬山を軍事的拠点として利用した。その過程で、対馬要塞には漁業協同組合が、鎮海湾要塞には日本人村が形成され、対馬住民と在朝日本人には中国と韓国に駐屯している日本軍に食品を生産・供給する役割が課せられた。

第3：在朝日本人が朝鮮地域社会で中心的な地域有力者層として形成していく過程について検討した。また、政治権と少数日本人の資本の独占、国の侵略に伴う土地獲得、変形的な資本蓄積過程など植民地資本主義の特殊性について、大池忠助など対馬出身者を中心に述べている。特に、植民地支配機関である日本軍と朝鮮総督府との関連性、府議会、道議会、居留民団体との関連性について考察している。これは、在朝日本人社会のなかでも、大きな格差社会が作られたことに注目して検討している。

第4：伝統地域と新都市開発地域にそれぞれ定着した在朝日本人の中での境界について検討した。その事例として、慶尚南道の伝統都市である晋州圏と新都市である釜山圏を中心に形成された地域境界について考察し、在朝日本人の間の葛藤について明らかにしている。

この過程は、日本帝国の国防的な戦略に基づいて行われたことで、朝鮮総督府は日本人が多い開港場、開市場を中心に新都市を作る政策を取っていた。伝統都市に定着した日本人が相対的に被害を受けることとなって社会的に大きな

地域葛藤が生じた事例である。主に、1920年から伝統都市晋州にあった慶尚南道の道庁を新都市釜山へ移転する過程で二つの地域勢力圏の対決となって、地域の境界、在朝日本人の内部の境界が形成された事例を中心に考察した。

要するに、1872年から1945年まで、明治政府の国民統合過程（帝国化）で、境界地域の人々は、自分の意思と関係なく帝国と帝国の植民地争奪戦に巻き込まれた。300年間平和的に朝鮮国と幕府の貿易中継地だった対馬と鎮海湾には軍事要塞地帯が設置され、相当の対馬住民は故郷を強制的に離されて、戦争の協力を強いられた。また、朝鮮における伝統都市と新都市の不均衡的な地域開発によって、地域と地域間の境界地域が形成され、在朝日本人内部の葛藤も生じた。少数の在朝日本人は、帝国主義化政治に便乗して、新都市の土地価格の急騰、土地分割独占などの高級情報を秘密裏に得て、巨大な富を蓄積した。それゆえ、朝鮮には、国家資本主義的な性格が強い格差社会が形成された。敗戦は、在朝日本人が境界地域で60～70年間の出稼ぎで儲けた財産と命を失う結果となって、再び日本国による被害者へ転回する切っ掛けとなった。結局、境界地域の在朝日本人は、自分たちの命と財産を求める選択肢がなく、日本国の植民地争奪戦に巻き込まれて境界の状況が激しく変わる際に、移民と移住、引揚げを催促されて、いわゆる「草の根の侵略者」となってしまったといえよう。

(きむ・ぎょんむ　法政大学大原社会問題研究所准教授)